

一八八二年三月五日(日)

真まことのヨーギーは万物のなかに自己アートマンを見

また自己のなかに万物を見る

まことに真理を覚った人は

あらゆるところを同等に見る

——ギーター6・29——

### 三度目の会見——ナレンドラ・ナート、バヴァナート、校長

校長はその頃、バラナゴルの姉の家に滞在していた。タクール、聖ラーマクリシュナに会ってからというものは、朝から晩までタクールのことを考えていた。いつもあの楽しい姿が目にかかび、あの甘くやさしい言葉が耳からはなれない。一見、いかにもみすばらしいバラモンが、いったいどうやってあの底知れぬほど深い真理を研究し、悟ったのだらうかと思いつづけていた。そして、その深遠な真理を、あのように簡単に、いともやさしい言葉で説明できる人物に、彼は今まで会ったことがなかった。いつ、あのかたのところへ行くか、いつまたお目にかかろうかと、そのことばかり夜も昼も考えていた。思いつづけてやると、三月五日の日曜日に行くことができた。バラナゴルのネパール氏といっ

しよに四時ごろ彼は南神寺トフキーンシヨルに着いた。

みると、先日行つた部屋の中で、タクール、聖ラーマクリシュナは小さい方の寝台の上に坐つておられる。(訳註——タクールの部屋には大小二つベッドがならんでいて、夜寝るときは大きい方、昼は小さい方に坐つて信者たちと話すのが常だった)

部屋いっぱいの人だ。日曜日で休みなので、信者たちが大ぜい、タクールにお目にかかりに来ているのである。校長はまだ誰とも面識がないので、部屋の片隅にそつと席をとつた。タクールは上機嫌で信者たちと話をしておられた。

タクールは十九才くらいの青年を相手にして、彼の顔をいとおしそうに見つめながら、さも嬉しそうに次から次へと話をしつらつしやる。青年の名はナレンドラ(後のスワミ・ヴィヴェーカーナンダ)といつて、サーターラン・ブラフマ協会サマージに出入りしているカルカッタの大学生だ。話しぶりは精気が満ちあふれて、両またの眼はキラキラかがやき、信仰の深さを感じさせる顔つきをしている。

話題は、世俗的な人たちに関するこつらしい。ひたすら神を求め、宗教について語る人びとを見ると、悪口を言つたり軽蔑したりする連中のことや、また、世間には悪い人間も大ぜいいるので、彼らをどんなふうに扱つたらいいかという話である。

聖ラーマクリシュナ「ね、ナレンドラ！ お前、どう思う？ 世間の連中はいろいろ言うよ！ けれどもホラ、象が歩いていくと、後ろからいろんな動物がいろんな声で吠えたてるだろう！ でも象はふりむきもしない。お前のことを誰かが悪口言つたら、どんな気持ちだい？」

ナレンドラ「僕はこう思います。犬がキャンキャン吠えている、と……」

聖ラーマクリシュナ「アッハッハッハ……。そりゃ、ちとひどすぎるよ（一同大笑）。

神さまはすべてのものに宿っていなさる。——とは言え、やつぱり善い人ときあつて、悪い人からは離れていることだ。虎のなかになつて神さまはいらっしゃる。とはいつても、虎を抱いて暮らすわけにはいかない（一同爆笑）。虎も神の表現なのに何故逃げるか。その答えはこうさ——『逃げる！』とすすめてくれる人たちも神の現れなんだから——。どうしてその人たちの言うこと聞かないんだ？

ひとつ、この話をお聞き。ある森に一人の聖者が住んでいなすつた。その方には弟子が大ぜいあつてね、ある日のこと、弟子たちにこんな教訓をなすつた——あらゆるものの中に神は宿っていらつしやるのだよ。よくこのことをわきまえて、すべてのものに合掌しなさい、と。

ある日、一人の弟子が、神前でたく聖火ホーマの用意をするために森に薪をとりに行つた。するとその時、突然、叫び声が聞こえた——『みんな逃げろーッ、気狂い象が来るぞーッ』あたりになつた人たちは皆すぐ逃げてしまつたのに、その弟子だけは逃げなかつたんだよ！ 象だつて神の現れなのだ、どうして逃げる必要がある？ 彼はこう考へて、それでそこにつつ立つていた。そして手を合わせて讚神歌をうたい始めた。象使いがこつちをみて大声で、どけーッ、逃げろーッ、とわめいている。弟子はそれでも動かない。とうとう象が来て、鼻で彼をつまみ上げて、道ばたにたたきつけて行つてしまつた。弟子は重傷を負つて気絶したまま、ぶつ倒れていた。

この報しせを聞いた師と兄弟弟子たちは、すぐさまとんできて彼を道場アトシヨウマに運び、薬をのませて手当て

をした。しばらくすると意識をとりもどしたので、誰かが、「気狂い象が来るって聞いたのに、君はどうして逃げなかったのだ？」とたずねると、彼は答えた。——『お師匠さまが、人間や動物や、そのほかあらゆるものになつていらつしやるのは、神ご自身であると教えて下さいました。それで、私は象神様が来るのだと思つて、そこからどかなかつたのです』

それを聞いて、師はこうおっしゃつた。『息子<sup>むすこ</sup>や、まったくお前の言う通り、象神様がやって来なすつたというのはほんとだよ。だがな、息子や、象使い、神が危いからそこどけとお命じになつたじゃないか。あらゆるものが神の表現<sup>あらわれ</sup>なら、どうしてその人の言うことを信じなかつたのかね？ 象使い、神のお言葉だつて聞かなければいけないよ』(皆笑う)

お経に、<sup>アポ・ナーラーヤナ</sup>(水は神なり)とある。けれども、ある水は神前に供えられるが、ある水は食後の口すぎや食器洗いに使われる。また水によつては、洗濯や、足を洗うのにだけしか使えないものもある。こういう水は、飲んだり神前に供<sup>か</sup>げたりはできないんだよ。ちようどそれと同じことで、聖者にも、不道徳な人にも、信心深い人にも、不信心な人にも、どんな人のなかになつて神は宿つていらつしやる。でもお前たちはね、不道徳な人や、神を信じない人や、悪い人とはつきあつちやいけないよ。親しくしてはだめだよ。口ぐらいはきいてもいい場合もあるが、それさえしてはいけない場合もある。こうした人たちからは、離れていなさい」

一信者「先生、もし悪人が他の人に悪事をはたらこうとしたり、また実際に悪いことをしているのを見て、黙っているのは正しいことでしょうか？」

〔在家の人と下等なマネ〕

聖ラーマクリシュナ「いろんな人間にまじって暮らしているんだからね、悪人から自分を護るためには、ときには下等なマネもしなけりやならんさ！　だが、相手が悪いことをしそうだからといって、先に向こうをやつつけるようなことは正しくないよ。

ある野原で牛飼いたちが牛を放してあそばせていた。その原っぱには一匹の恐ろしい毒ヘビがいるので、皆は怖がつてたいそう気をつけていた。ある日のこと、そこへ一人の修行僧が通りかかった。牛飼いたちはかけよって注意した。『お坊さま！　そちらへ行つてはいけません！　恐ろしい毒ヘビがいますから』——すると修行僧は、『なんでもないよ、私はそんなもの怖くない。ヘビ除けの真言を知っているからね』こう言つてどんどん歩いていく。牛飼いたちは恐ろしがって誰もついて行かなかつた。毒ヘビは、せい一ばいふくらませた鎌首をもたげて修行僧めがけてすばやく近よつてきたが、そばに来るやいなや、僧が真言をとなえたので、たちまちミミズのようにちぢこまつて地べたにねころんでしまった。僧は言つてきかせた——

『コラ、お前は どうして そう悪さばかりしてまわるのだ。さあ、私が尊い真言を授けてやろう。この真言をとなえていると、だんだん神さまへの信心がわいてきて、そのうちに悟りをひらくことができるし、悪い性質もすっかりなくなるよ』

こう言つて僧はその毒ヘビに真言をさすけた。ヘビは真言をいただいてから、うやうやしく師を礼拝して質問した。『お師匠さま！　どうやつて修行したらいいかお聞かせ下さい』師はおっしゃった

——『いつもこの真言をと覚えていなさい。そして誰に対しても悪いことをしたり傷つけたりしてはいけない』

修行僧は、『また来るからね』と言つてその場を去つた。

そうこうしているうちに何日か経つた。牛飼いたちは、あの毒へビがもう人を咬かもうとしないのに気がついた！ 石を投げつけても怒りもせず、ミミズみたいにおとなしく行つてしまふ。ある日、一人の牛飼いがそばに行つて、シッポをつかまえてプルンプルンとふりまわしたあげく、エイツとばかり地面にたたきつけた。へビは血を吐いて気絶し、のびたままピクリとも動かなくなつた。牛飼いたちは、とうとう毒へビめも死んだか、と思ひながら皆してひきあげて行つた。

夜が更けてからへビの意識は戻つた。かれはノロノロと大変な苦勞をして自分の穴までたどりついた。全身の骨があちこち砕けてしまつて——動く力さえない。いく日か経つと骨と皮ばかりになつてしまつたが、それでも食物をさがしに、夜中に一度だけソーツと出てくる。昼間は怖いから出かけない。真言をさずけてもらつてからは、もう二度と悪いことはしなかつた。枯葉だの、木から落ちた木の実などを食べて命をつないでいた。

およそ一年あまり経つて、例の修行僧ほうさんが同じ道をやつて来た。さつそくへビのことをたずねると、牛飼いたちは、『あのへビは死にました』と答えた。でも、坊さんは彼らの言うことを信じなかつたよ！ あの真言をと覚えてある生きものは、悟りを開くまでは決して肉体が減びないことを知つていたからね！ あちこち探しながらへビにつけてやつた名前を何度も呼んだ。師の声を聞きつけたへビ

は、穴からはいだけしてきて、ていねいに、なつかしそうに師を拜した。

『やあ、元気でいたかい?』ときくと、

『ハイ、元気でおります』

『でも、ずいぶんヤセせたね。どうかしたのかね?』

『お師匠さま、あなたさまは私に、誰をも傷つけてはいけなとお命じになりました。ですから私は木の葉や落ちた果実<sup>み</sup>だけを食べておりますので、たぶん食べもののせいでこんなにヤセたんだと思います!』

かれは、すっかり善良な性質<sup>サットウツワ</sup>になって、誰に対しても怒りを感じなくなっていたのだ。あの牛飼いたちに死ぬほどの目にあわされたことさえ忘れてしまったんだよ!

『食物のせいだけで、こんなにヤセるはずはないなあ。ほかに何か原因があるにちがいない。よく考えてごらん』

へビはやつと思ひ出した。『そうです、そうです。お師匠さま、今、思ひ出しました! いったったか、牛飼いたちが私のシッポをつかんでふりまわして、地面にたたきつけましたっけ。あの人たちは無智なものですから、私の心の状態がわからなかつたんです。私がもう誰にも咬みつかないし、悪いことなんてホンの少しもしないのだということが、彼らにわかるはずがありませんもの』

坊さんは舌打ちした——『チェッ! ばかだなあ、お前は——。自分の身を守る方法も知らないのか。私は咬みつくことは禁じたが、音をたてることは禁じなかつたぞ! なぜファーツとかシューツとか

唸<sup>うな</sup>って、やつらをおどしてやらなかったんだね?」

悪い連中がそばに来たら、ひどい目にあわされないうちに、ファーツとかシューツと、派手な音をたてておどかしてやれ。ただし、やつらの体を傷つけたり、毒をいれたりしてはいけないよ」

〔人はみな同じか? 性状の相違〕

「神の創造のなかには、実にさまざまな人間や動物や草木がある。動物のなかには、いいのも悪いのものもある。虎のようにどう猛な生きものもいる。草木のなかには、甘い実がなるものもあるし、毒の実がなるものもある。それと同じことでね、人間のなかには善人もいれば悪人もいるんだよ。聖者もいるし、あきれた不道徳漢もいる。不信心な俗人も多いが、信心深いきれいな心の人もいる。」

この世にいる人間は、大ざっぱに分けて四種類あるんだよ。——縛られた人。解脱を求める人。解脱した人。それから、永遠の人。

永遠<sup>ニテイヤ</sup>の人は——ナーラダのような人たちだ。人びとを幸福にするため、人びとに真理を教えるためにだけ、この世にいる。

縛<sup>バ</sup>られた人は——世間のことに心を奪われてしまい、神のことをすっかり忘れている。夢にも神のことなど考えたりしない人間だ。

解脱<sup>ムムクシユ</sup>を求める人は——この世のカセから、自由になりたいと思つて努力している人たちだ。だが彼らのなかでも、解脱できる人もあり、できない人もある。



解脱ムクツタした人は——この世の女と金カネに縛ムスられない。聖者サイドクや、偉大マハイトマな魂の人だ。この人たちの心には世俗セキヤク的な思いは全然なく、ひたすら神の蓮華の御足を想オモっている。

湖に魚網イサヅメがしかけてある。二、三匹の魚は利口で、決して網にかからない。これは永遠の人トキトキノヒトに似ている。だが、ほとんどの魚は網にかかってしまう。このなかで、いく匹かの魚は逃げようとしてがんばる。これが解脱ムクツタ(自由)を求めの人だ。けれども皆が逃げられるわけではない。二匹か三匹くらいが、ドボン、ドボンと音をたてて逃げていく。——そんなとき、漁師は言うよ。『オッ、一匹でかい奴が逃げちまったぞ!』

しかし、網にかかった大部分の魚は逃げられない。逃げようとしてもしない。それどころか、網の目を口にくわえて湖底の泥ドロのなかにもぐりこんで、ジツとして横ヨコになって、『もう心配ない。おれたちはうまくいっている』などと考えている。やがて漁師たちが網を引きあげて、一匹のこらずつかまってしまうのに、それがどうしてもわからないんだ。

これがそっくりそのまま縛ムスられた人の有様だよ」

〔世俗的な人Ⅱ縛ムスられた人〕

「縛ムスられた人たちは、この世の女と金に縛ムスられて手足の自由がきかない。その上、この世では女と金によって幸福コウフクになれるし、これさえあれば怖いものなしだと思っている。それによって滅メばされることがわからないんだよ。縛ムスられた人がこの世から去るとき、女房メカはこんなことを言う。『お前さんが

いってしまつたら、私はどうしてやってはいけないの？」また、迷妄にとらわれられているものだから、ランプが明るく灯っているのを見て、『油が無駄じゃないか、もつと暗くしてくれ』などと言う。いま死ぬところだというのに！ 縛られた人は神のことについて考えない。ヒマがあればつまらん無駄話をしたり役にも立たんことをする。どうしてそんなことをしているのかときくと、『私はジツとしておれない性質だから、ヒマつぶしにやってるんですよ』——よくよく時間をもてあますと、トランプが花札でもおっぱじめる」（一同黙然）

わたしが不生 無始であり

全宇宙の至上主であると知る者のみ

人間のなかにあつて幻影に迷うことなく

全ての罪けがれから解放される

——ギター——10・3——

方法は？——信ずること

一信者「先生、そうした俗人が救われる方法はないものでしょうか」

聖ラーマクリシュナ「もちろん、方法はあるよ。出家や有徳の人と交際すること。そして時どき独りになって、静かに神を想えばいいんだよ。それから物事をよく分別することだ。あの御方（神）に、

『どうぞ私に信仰と信念をお与え下さい』と言つて一生懸命にお祈りしなさい。

「信じる」ことができたなら、もうそれでいいんだよ。これ以上のものはないんだから。ケダル、お前、信じるのがどんなに大きな力か聞いているだろう？ 聖典ブライにある話だが、全知全能のナーラーヤナ大神の化身であるラーマ王子は、セイロン島に渡るとき橋をかけた。ところがラーマの信者だった猿のハヌマーンは、ラーマの力を信じて、ラーマの御名を念じながら海をとびこえてしまった。彼には橋なんか必要なかったのさ（一同笑う）。

ヴィビーシャナ（ラーマの信者でセイロンの王子）は一枚の木の葉にラーマの御名を書き、ある人の服に結びつけてやった。その人は海を渡るのだ。ヴィビーシャナは言つてきかせる。

『何も恐れるな。信じて水の上を歩いて行け。だが、気をつける。信を失つたらさいご、たちどころに沈んでしまうぞ』

その人は調子よく水の上を進んで行つた。

と、突然、自分でもどうにもならない欲求にかられた——『服にいったい何が付けてあるのか、一度だけ見てみよう！』

ひらいてみると、ラーマの御名が一つ書いてあるだけ！ 彼は思った。『なあんだ！ ラーマの名が一つ書いてあるだけか！』不信の念が起こつたとたん、彼は海に沈んでしまった。

神を信じている人は、たとえ大きな罪を犯すようなことがあつても、——つまり、牛やバラモン（僧）や女を殺すようなことがあつても、神への信仰によって重い重い罪から解放ホトされる。その人が『私は

もう二度とこんなことはいたしません』と、心から思っ  
て言えば、もう何一つ恐れることはない」  
こう話されてタクールは、〃重き罪と尊き御名〃の歌をおう  
たいになった。

ドウルガー、ドウルガーと御名よびて

われもしこの世を去るならば

いとあさましき身なれども

ついに神をば知るならん

め牝牛や僧を 手にかけて

はらこ胎児を殺し 酒によい

かよわき女を 傷つけて

重ねし罪も わがころ

つかの間さえも 氣にならず

大実母1の御足に ただすがるなり

〔ナレンドラとホーマ鳥〕

聖ラーマクリシュナ「この青年(ナレンドラのこと)を見てごらん。ここでは、こんなふうだがね。イタズラ1子も、お父さんの傍にいるときは借りてきた猫のようだが、中庭で遊ぶときは全く様子がちが

ドウルガーは、〃宇宙の大実母〃の一名。根元2造化力3を女性神と見なして、現れる場所と役目によって相4と名5が違6う。ドウルガーは虎に乗った十本腕の美女神の相で、〃力〃を表す。

うよ。この子のようなのは、永遠ニテイヤの完成者シッダの列にはいる。こうした人たちは、決して俗世に縛られない。も少し年齢としがいくと靈意識がめざめて、まっすぐに神へ向かつて進むんだよ。彼らがこの世に生まれたのは、ただ人びとを教え導くためだけなんだ。俗世のことにはちつとも興味がなく——つまり、決して女と金に心を奪われるようなことはない。

ヴェーダにホーマ鳥の話がある。大空はるかに高くその鳥は住んでいるんだよ。その高い空で卵を産む。卵はさっそく落ちはじめ。あんまり高いところなもんだから、何日も、何日も、落ちつづける。すると途中で卵が割れてヒナがかわる。落ちながらヒナの目は明あき、羽も生えそろってくる。目が明くとヒナは、自分が落ちつづけていること、そして地面にあたればコナゴナになって死ぬなことを覚さとる。すると、そのヒナはすぐ向きを変えて、母鳥のいるところめがけて、猛烈な速さで高くかけ昇のぼっていく」ナレンドラが立ち上がって出ていった。部屋のなかには、ケダル、プランクリシュナ、校長はじめ、大ぜいの人がいる。

聖ラーマクリシュナ「ごらん、ナレンドラは歌うのも、楽器をならすのも、学問も、何もかもよくできる。こないだもケダルと議論していたが、ケダルの言うことをコテンコテンにやつつけていたよ。アッハッハッハ……(タクールと皆笑う)。

(校長に向かって)——英語で何か議論のことを書いた本があるかい？」

校長「はあ、ございます。英語では論理学ロジックというのがございます」

聖ラーマクリシュナ「そうか。どんなことを言っているのかな」

校長は、いささか困惑した。こんなふうに話してみた——「一般的な結論から、個別の結論をひきだすことについて書いてある部分がございます。その一、たとえて申しますと、すべての人間は死ぬ。学者たちは人間である。従つて学者たちは死ぬ——というような。

それからもう一つは、特殊な例や出来事を見て、一般的な結論をひきだすという場合もあります。例えば、このカラスは黒い。あのカラスも黒い。我々が見るカラスはみな黒い。従つてカラスはすべて黒い——というわけです。しかし、この種の結論は往々にして間違ふことがあります。なぜかと言いますと、よく探せば、ある国には白いカラスがいるかもしれないからでございます。また別の例をあげますと——雨が降っているところには、雲がわいているか、あるかする。従つてこういう一般的な結論になる。すなわち、雲から雨が降つてくる、と。もつとほかの例では——この人には歯が三二本ある。あの人も歯が三二本ある。そしてわれわれが見る限りの人には歯が三二本ある。従つてすべての人には三二本の歯がある。

こういったような一般的な結論について、英語の論理学では説明されております」  
聖ラーマクリシユナは、殆ど話を聞いておられなかった。聞きながら忘我の状態になつておられた。そのため、もうこの主題についての議論は先に進まなかつた。

君の心がヴェーダの美辞麗句に

決して惑わされることなく

自己の本性を覺つて三昧サマデーに入ると

至聖カミの意識に到達するのだ

——ギーター 2・53——

### 三昧境

今日のお話は終わった。信者たちはあちこちへ散歩にでかけた。校長も五聖樹パンチャパテイの杜の辺りをぶらぶら歩く。時間は午後五時頃であろう。

しばらく散歩してから、校長が聖ラーマクリシュナの部屋に戻ってみると、部屋の北側の小ベランダで驚くべきことが起こっていたのである！

聖ラーマクリシュナはじつと立っておられる。ナレンドラが歌をうたっており、他に二、三の信者たちが立っている。校長も来て歌をきいているうちに、すっかり魅了されてしまった。タクールの歌声以外にこれほど甘美な歌を今まで聞いたことがない。——ふと、タクールの方を見てハッと驚いた。タクール、聖ラーマクリシュナは身じろぎもせず立ったまま、まばたきもなさらぬ。呼吸いきさえしておられぬようだ！そばにいた信者の一人にきいてみると、これが三昧サマデーという状態とのこと！校長はいまだかつて、こんな有様を見たことも聞いたこともない。

彼は驚き畏おそれて思った——神を想うことで、人間はこれほどまでに外界のこと一切が忘れられるものなのか？ いや、私などには想像もできぬほどの深い信仰と強い信念があるからこそ、こんな状態

になれるのだ……。

ナレンドラの歌はつづいている――

きよらかな聖なるハリを

わがこころ想いこがれぬ

その光くらぶるもなく

その相すがたいとうるわしく

信者まめひとの胸よろこばす

ハリはヴィシユヌ神の別名

新しき色にかがやき

千万の 月をもしのぐ

かの光 雷光のごと

わが生命いのち、歓喜にふるう

歌詞がここに来たとき、タクルル、聖ラーマクリシュナは身を震わせておられた。髪の毛は逆立ち、お体を震わせていらっしやるのだ！ 眼からは歓喜の涙が流れている。時どき、何かを見ているようにお笑いになる。〴〵千万の 月をもしのぐ〴〵 ような、比類ない美しい何ものかを見ておられるのかも



知れない！これが、至高なるものの靈姿を見る。ことなのだろうか？ どれほどの修行や苦行をすればこれほどの不動の信仰が得られ、このようにして神を見ることが出来るのだろうか？

再び歌は先へすすむ――

かの君の 蓮の御足を

わが胸に しかといただきぬ

安らげく 愛のまなざし

なつかしく やさしきものよ

また、何とも形容できぬタクルの気高い笑顔！ お体は微動だにしない！ まばたきもせぬ両眼！ 何かたとえようもない美しいものを見ておられるような様子！ そして、その凡俗には想像もできぬ光景を見て大歓喜にひたつておられるのだ！

歌は終わりに近づいた。ナレンドラはうたう――

信仰バクテイの 衣ころもまといて

真智なる歓喜の水に

君よひたれ！ 永遠とわに安やすけく

第1章 師との出会い

サマーデイ プレミアム<sup>ミチ</sup>ノソング  
三昧と愛の歓喜、これまで経験したことのない光景を胸の奥深く刻みこんで、校長は家路についた。  
途すがら、あの魂もとろかすように甘美なナレンドラの歌が胸にひびいてくる――

真智なる歓喜の水に

君よひたれ！ 永遠に安けく！